

二〇二二年度

第二回入学試験問題

【国語】 時間 45分

【校長からのメッセージ】

おはようございます。まず、左の【注意】をていねいに読んでください。今日までよくがんばってきました。

鷗友生は困難な事があってもあきらめずに、何とかしようと努力します。今日の問題に対して、皆さんも最後まであきらめずに解答しましょう。

試験の開始までもう少し。

深呼吸して気持ちを落ち着かせて待つてください。

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題用紙は、全部で11ページあります。試験中によこれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生をよんでください。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。
- 4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これは、ほんのたわいもない暗闇くらやみについての話である。半月ほどまえ、ひよいと、私はこの古い記憶きおくを思いだした。

私の生うまれた家で、二歳さいちが違いの姉と妹と私の三人の子供らが寝る部屋は、七畳半じゅうの細長い間取りであった。私が小学校も半ばを過ぎるまで、古くからいる主のような年老いた婆ばあやも一いっしょ緒に寝てくれた。兄はずっと歳としが上だったから、二階に自室を持つていた。

幼な心にはかなり広く思えた私たちの寝る部屋には、筆筒たんすが一つと、古風な柱時計があるだけで、他には何もなかった。いま考えてみると、八畳の客間より小さいのだから、あれだけ広く感じられたのがふしぎだが、机一つなかったことと、なにより細長い変則な間取りのせいであつたろう。

とにかくその部屋は、幼い私にとつて、異様にだだっ広く、がらんとして、殺風景であつた。(注1)なかんづく夜には。婆やがそばに寝にきてくれるまで、正直のところ怖こわかった。ある時間がくると、電燈でんとうは二燭光(注2)のごく小さいものだけにされてしまう。その乏とほしい光の中で、部屋は二倍の大きさに拡大した。

そして、振子かりこのついた柱時計が、秒を刻む音がいやにはつきりと耳に伝わってきた。昼間は意識もしないその音は、薄闇うすやみの間が暗いなりにまるきり透明とうめいになってしまつて、あるいは距離きょりを失つて、直接、耳元に響ひびいてくるような感じがした。

刻ときを告げるとき、その柱時計は、まずジーという音を立てた。かなりの間ジーといつていてから、おもむろに鳴りだすのであつた。ボーン、ボーン、ボーンと、ごく平凡へいぼんに。

そのジーという機械音がまた、私の心細さを助長させた。ボーンという音はずつと親しみが抱いだけた。だが、それが鳴り終わつてしまつたあと、ぽつかりと空間に穴ぼこがあいたかのようで、それから酷薄こくはくに秒を刻む音が、更あらためて響きだすのであつた。寒い冬でも、この部屋には火鉢ひばちひとつ置かれなかつたと記憶する。火鉢が置かれるのは、子供らの誰だれかが風邪かぜを引いて熱を出したときくらいのことではなかつたか。もつとも小さい子供のことゆえ、次々と感かん染せんして、姉も私も妹も、枕まくらを並べて寝こむということが多かつた。そうすると、この部屋にも火鉢が持ちこまれ、炭火の上に洗面器をかけて湯気を立てさせるのが当時の

習慣であつた。

蒲団ふとんに湯たんぼが入れられたのも、毎晩ではなかつたように思う。いや、ずっと少いすくなことだつたと思う。なぜなら、厳冬の蒲団にはいつてからしばらく、なんとも寒くて堪たらなかつたことを非常にはつきりと覚えていたからだ。

小学校二、三年ころ、別室(注③)の行火あんかに寝巻をかけておき、それを着ると実に暖かく快い感かん触しよくだつたことも覚えているから、もつと幼いあの当時は、衣服を脱ぬがされて冷つめい寝巻に着代きがえさせられていたような気がする。

なにしろ、寝床ねとこにもぐりこんでも、寝巻も蒲団も冷ひやえていて、やつとぬくもりだすまで、五体が震ふるえ、歯がカチカチと鳴つた。そのうち、ようやく人心地ひんしんちがついてきて、なかなか訪おもてこない眠気ねむけを待っている、そういうときこそ柱時計の音がいやに大きく耳に聞こえだすのだつた。

ところで、三人の従兄いとこたちが家に泊とまりがけで遊びにくるとなると、この状態は一変②した。子供の数が二倍になればそのにぎやかさは二倍どころか、それこそ四倍にも五倍にもなる。まして、従兄たちはすべてかなり悪戯いたずら好きの男の子で、私たちとちよどど同年齡どうねいくらいであつたから、これは相当な騒さわぎとなるのが当然である。

私たち子供たちは、昼から夜まで、およそ子供の考えつくありとあらゆる遊びをやつた。屋内で遊ぶ場合は、やはりその七畳半の部屋が根拠地こんきよちであつた。

私が夜の寝床をこく冷く、かつ怖く思っていた幼いころ、みんながどんな遊びをやっていたかはよく覚えていない。従兄たちが遊びにきていた期間は私が中学の後半に至るまでのかなりの歳月であつたから、どういう遊びをどの時代にやっていたかは、記憶を探つてみてもすこぶる曖昧あいまいである。

とにかく、目隠めかくしをして「鬼おにさんこちら」もやつたし、或あるいは柱が陣地じんちであつて、柱に掴つかまっているときは安全という鬼ごっこもやつた。共にみんなが幼いころの遊びであつたろう。まさか小学校も上になつて、七畳半の部屋の中を六人の子供が柱から柱へドタバタと走りまわつたとは考えられぬから。

もう一つ覚えているのは、確か姉が、蜜柑みかんを焼いて食べることを発明したことである。蜜柑というのは冷いからおいしいのだと今は思うが、その頃はみんな夢中になつてこれを真似まねた。蜜柑を火鉢の炭火のうえに直接のせる。炭火が乏しいから、一度に二つくらいしかのせられない。それで、

「これはあたしのよ」

「この次はぼくの番だ」

とか言いながら、火鉢のまわりをぐるりと囲んで、焼けるのを待っていた。

すると、特有な、甘酸っぱさと香ばしさの交ったような匂いが漂ってくる。蜜柑の底がこんがり黒くなったところ食べるのである。皮の半分は柔かくなっている、それをむくと、湯気の立つ実の房が現れた。特にそれがうまかろうはずもないが、私たちはすばらしい味だと思っていた。

夜には、七畳半の部屋に一同が寝た。細長い部屋の、それこそ一面にぎつしりと蒲団が敷かれていたことが強い印象として残っているが、果して六人分の敷蒲団が敷かれたかどうかは定かではない。しかし、いつもはがらんと感じられたその部屋は、蒲団だけでも一杯になって、まして六人の子供のかもしれないだすうわついた熱気に満ち、怕いどころの話とは縁遠くなった。もちろん婆やはいるところがなくなっている、他の部屋に寝るのだったが、従兄たちがいるかぎり、うるさいお目付役がいなくなるのはむしろ有難い感じであった。

だが、その頃、私たちはまだ小さかったから、夕食が済んでろくに時間も経たぬうち、その婆やがやってきて、半ば強制的に私たちを寢床に追いこむのはやむを得ないことであった。部屋一杯の蒲団は、私たちの夕食中に、すでに敷かれていたような気もする。

だが、無理強いに寢床に入れられてしまっても、私たちはおとなしくすぐ寝つきはしなかった。誰か一人が、意味もなく笑いだすと、それがたちまち感染していつて、ついにはみんなが突拍子もない声で変な笑い声の合唱となる。或いは、向うで、

「アツ、オバケ」

という声がすると、こちら側で、

「ヒュウ、ドロドロ」

「ワツ、こわい」

などという声があがる。

繰り返し返すが、いつもはだだっ広く殺風景に感じられたこの七畳半の部屋が、私にとっても怕いとか寂しい場所とはまったく逆の、なんとも愉しくにぎわしい、ほとんど天国のような存在に変じたことは確かなことであった。

その年齢のころであつたらう。私は一つの遊びを發明した。

元はといえば、婆やがうるさく騒ぎすぎる子供たちを、一刻も早く寢床に追いやろうとする習慣が生んだものかも知れない。ともかく、私と二人の従兄くらいが、先に寢巻に着替えて床にはいった。しかし、時刻があまりといえは早すぎた。他の子供たちは、まだ何かをして別室で遊んでいた。

あれは冬であつたにちがいない。なぜなら、あの遊びには、ぶ厚い掛蒲団、外光を完全に遮断する蒲団が必要であつたから。先に述べたように、暖房とてまったくくない昔の話だから、冬の掛蒲団はぶ厚いのが二枚もかかつていたと記憶する。それはかなり重たかつた。まして小さな子供の身にとつては。

私たちは、早く寢床に入れられた腹いせもあつて、自分らの離れ離れの枕におとなしくつこうとはしなかつた。まだ電燈も明るいのが点されていた。そこで私らは、ぶ厚い掛蒲団の下をもぐつて、六人分用の敷蒲団のうえを這いずりまわつた。もともと大人用の蒲団であつたし、一緒に寝るべき半数の者がいないとなると、まして掛蒲団の下の人工の暗闇の中を這いずつてみると、その面積は意外と広く感じられた。小さな体が、七畳半にすぎないが、それよりずっと広い面積と思える暗黒の箇所を、のろろと不器用に、いわば潜水しながら這いずるのは、いとも不可思議な思いを覚えさせた。

もとより、唐突に足がからまつたり、頭が真向からぶつかつたりすることもある。そんなとき、私たちはわざと大形な悲鳴をあげてみたり、格闘の真似事をしあつたりした。

あるとき、ふと気づくと、従兄たちはそれを完全な潜行遊戯、または光もとどかぬ深海に於る潜水艦合戦とでも合点したらしく、ひっそりと音も立てなくなつていた。そう私が気づいてみると、彼らの存在が不明なものも不気味であつたが、それよりも、自分のいる位置が一体どこいら辺りなのか、皆目わからなくなつていのが、いっそう不安であつた。否、驚異であるといつてもよかつた。

こんな体験はかつてなかつた。私の生まれた家のそばには、広大な青山墓地があつて、その樹木の鬱蒼とする土地の中で、迷子になりかかつて恐しかった経験はある。しかし、七畳半の部屋、それよりは面積の少い蒲団の中で、一体自分がどこにいるのか、どちらの方向を向いているのか、それこそぜんぜんわからないという感覚は、想像もつかないことであつた。

そのときは、おそろおそろ、私は重たい掛蒲団の下を移動していつて、蒲団のはずれに出た。掛蒲団を押しつけてみると、そ

こは部屋のいちばん外れの、電話室と呼ばれている二階への階段下の小部屋へ通ずる唐紙の前であった。呆然としたおののき、驚異につながるものは瞬時にして消え去り、ほっとした安堵以上に、「ああ、おもしろかった」という意識が訳もなく全身をひたした。

私はその体験というより、心底からおもしろいと思った蒲団もぐりの遊び方を——なぜならその当時の行為はすべて遊びにながっていたから——従兄たちや姉や妹にも話したはずだ。だが、みんなはいくらか同じ動作を試みたあと、なぜかそれを真似ようとしなかった。あの頃は、たとえば蜜柑を焼いて食べるという単純な行為にしる、争ってみんなが同じようにしていたというのに。

それゆえ、一時的ではあったが、私はただ一人でその遊びを行なっていた時期があった。夕食を済まして七畳半の部屋にきてみると、すでに蒲団はぎつしりと敷かれている。服を着たまま、その掛蒲団の下にはいつて、一人勝手に、人工の暗闇の中をめぐりまわるのである。蒲団はびったりと接して敷かれていたし、掛蒲団にしるむしろ重複してかけてあったから、隙間から光がはいってきたり、外が見えてしまうということは完全になかった。

それでも、蒲団の下で単に往復しては方向感覚が乱れることもないから、私はできるかぎりぐるぐるまわったり、斜めに進んだり、急に横転したりした。それでも、頭のどこかで、今どちらに向っているのかという作用がどうしても働いてしまうから、ときには動くのをやめ、三分間ほどもせんせん別のことを考え、またすばやく向きを変えて、もぞもぞといざったり後退したりもしてみた。

そうやって、かなりの努力と苦勞の挙げ句、うまくすると、このまえとそっくりの、自分の位置から、頭が部屋のどちらの方へ向いているのかさえ、せんせんわからないという事態がふいに起こることがあった。

そのときは、ごく嬉しかった。なんともいえない奇妙で不可解な意識が全身をひたした。その呪縛されたような意識の中で、じつと、果たしてこのまま進めばどこへ出るのかを全霊をこめて考えるのである。服のまま長いこともぐって動きまわっているため、じつとりと汗までかいている。いくら耳をすましても、厚い掛蒲団のせいで柱時計の秒を刻む音も聞こえてこない。そして、いくら考えても、ついに方角の見当がつかないとわかった瞬間、およそ愚かしいぞくぞくするような喜びがやってくる。それから、やはりこの向うは押し入れに面していると仮定を立てて進んでいつて蒲団の端に辿りつき、相当のスリルを覚えつつ首を突きだしてみると、予想がまったく逆だったときの、たとえようもない不可思議な嬉しさ。一体、あれは何であったの

か。

④ もっとも、このようにまく行く場合はむしろ稀まれといつてよかつた。せつかく方向を失いかけているときに、柱時計がボン、ボンと鳴りだせば、すべてはお終しまいである。或いは、それまで居間にいたはずの従兄たちが、足音としゃべり声を立てていつもの通路の電話室からやってくれば、やはり御破算ごはさんになるのである。

そんなことよりも、意識的には懸命けんめいに方角を失おうとして、闇雲いんぐんに動いたり、他のことを考えたりしているのだが、同じ行為を何回も試みているうちに、頭の一隅いちぐうではどうしても、今はこちら側へ行った、今度は半回転したと執拗しつように自然に考えてしまふらしく、重たい蒲団の下でいくら汗をかいても、なかなか迷子になれないことが多かつた。せつかくうまくゆきかけても、しかしやはりこの自分の頭は電話室に向っていると判断して、首を突きだしてみるとやはりその通りだったりしたときは、異常なくらいがっかりした。比較ひかく的てきうまく行った場合であっても、これは玄関げんかんに面した唐紙のいちばん端に出ると思つて、実際に首を出してみると、方角はちゃんと当つていて、せいぜい唐紙の位置が一枚ずれているくらいのが多くなつてきてしまった。

そのため、私はこの遊びを、わりあい短期間でやめてしまったようだ。しかし、成功率が低かつただけ、ごく稀まれに完全に方角がわからなくなり、重たい蒲団の下の暗黒の中で目を瞠みひらきながら、懸命けんめいに考えに考え、そのくせその予想が完全に裏切られたときの喜びは、ひととき大きかつたように覚えている。

私は臆病おくびょうな子で、従兄たちがこないときの、がらんとした七畳半の夜が怖かつた。彼らがきてくれたときのみ、七畳半はにぎにぎしい歓楽かんらくの場所となつてくれた。いわば私はその上に安住して、つかのま、ひたすら暗闇の世界を、また目ざす先ゆくえが行方ゆくえも知れないという奇妙な体験を、わくわくする気分をもつて味わいたかつたのかも知れない。

(北杜夫『まっくらけのけ』)

(注1) なかんずく……とりわけ。特に。

(注2) 二燭光……ろうそくを二本ともしたときと同じぐらいの明るさの電球。

(注3) 行火……小さな箱に炭火を入れて手足を暖める道具。

問一 — 線部① 「その乏しい光の中で、部屋は二倍の大きさに拡大した」とは、どのようなことですか、説明しなさい。

問二 — 線部② 「この状態は一変した」とありますが、これはどのようなことですか、七十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部③ 「ああ、おもしろかった」とありますが、これはどのような気持ちですか。そのような気持ちになった理由もふくめて説明しなさい。

問四 — 線部④ 「このようにうまく行く場合はむしろ稀とってよかった」とありますが、それはなぜですか、説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、この文章はアメリカの動物文学者であるシートン（一八六〇～一九四六）の生涯（しょうがい）について書かれたものの一部です。

翌年一月に、シートンは自由主義的な芸術学校、ジュリアン・アカデミーに登録し、ジーン・レオン・ジェロームに色、光、そして筆づかいについての指導を受けながら、絵を描（か）きはじめました。けれど、シートンは動物の美しさは描きましたが、あいかかわらず肖像画（しょうざうが）はいっさい描きませんでした。

パリですぐにわかったのは、ロイヤル・アカデミーのときと同じだということでした。パリに滞（たいざい）在して二カ月もたないうちに、もうアメリカの友人にだした手紙に、「もう一度、マントバの大平原や、サンドヒルに行きたいという願望（ねんぼう）に押しつぶされそうになる」と書くありさまでした。（注）ウルフが忠告してくれたとおり、パリには動物好きな画家はひとりもいませんでした。

もっとも今度は、パリがいやになったというだけでは帰りませんでした。サロンに挑（ちようせん）戦し、大賞をものにするという目的はゆるぎませんでした。動物の絵しか描かず、パリの画壇（がだん）におもねることもなく、流行や古典派の様式にも無関心という、シートンの絵にたいする姿勢そのものが、サロンへの挑戦でした。シートンはサロンに入選すること自体が目的ではなく、絵の入選をおして、自分の理想をアピールすることを考えていたのです。

シートンはまず、二×四フィート（一フィートは約三〇・五センチ）のキャンバスに、ほんもののオオカミをモデルに描いた『眠れるオオカミ』を、一八九一年のサロンに提出して入選しました。

これに力をえて、一八九二年のサロンには、四・五×七フィートの大きなキャンバスに、オオカミが人の頭にかじりついている姿を描いた『オオカミの勝利』を、これで大賞の金メダルはまちがいなしとばかりにもちこみました。この大作は、ピレネー山脈でオオカミにおそわれた、木こりのニュースに着想をえたものでした。シートンはこの絵を描くために、パリ郊外（こうがい）に野外セツトまでつくりました。バケツいっぱい（いっぱい）のウシの血をもらい、雪原にばらまき、悲劇の現場を再現したのです。

ところが前の年に、それほど力を入れなかった『眠れるオオカミ』①が入賞したのに、自信作『オオカミの勝利』は、金メダルどころか入選さえしませんでした（ただ、同時に提出した小品のいくつかは入選しました）。

『眠れるオオカミ』が入選して、力を入れた『オオカミの勝利』が落選したのは、シートンの絵の姿勢にたいするサロンの審査員の回答であって、むしろ当然のことだったかもしれません。『眠れるオオカミ』に描かれたオオカミは眠ってはいても、つねにあたりを気を配り、いつでも危機におうじる用意のある、野生そのもののオオカミでした。そして、ヨーロッパにはすでない、アメリカ大陸の野生を象徴していたのです。にもかかわらず、この作品がサロンに入選したのは、パリの大物画家である審査員には、シートンの絵のメッセージが理解できなかったからでした。審査員はただ、シートンの絵のたぐいまれな写実性と、技量の高さだけを評価して入選にしたのです。

一方、『オオカミの勝利』のメッセージは、パリの人々に確実に誤解される新しい着想でした。つまり、シートンはオオカミの復讐を描くことで、そこまでオオカミを（すなわち自然を）追いこんだ、人間の暴力をあばきだそうとしたのです。やがて人間は、自然から猛烈なしつpegがえしを受けることになる、シートンはいいたかったのです。でも、パリの人々は、人間が自然になにをしたかを考えたことすらなく、キリスト教の教えのとおり、自然を支配するのは人間の使命と信じていました。

画壇の長老、ウィリアム・ブライナーは、「魂のない野生動物の犠牲者として魂をもつ人間を描くことは、神ではなく自然が支配者であると主張するのにひとしい。すなわち、異端である。シートンの作品はぜったいに受け入れられない」といったと伝えられています。キリスト教的な人間中心主義の考えにひたりきったパリの世界を、シートンの『オオカミの勝利』はあばきだしたのです。

落選におどろきはしたものの、それはシートンには、なかば覚悟のことでありました。シートンにとつてたいせつなことは、評価されることではなく、世界を知ることでした。どのようなことをパリの画家が考えているかが、わかればよかったです。

ある日、シートンはルーブル美術館ですごして、自分がパリの画壇の人間とは、まるで異質であることを感じていました。ルーブル美術館にかざられた巨匠たちの絵を見て、シートンはこんな感想をもちました。

その日の午後、私はルーブル美術館ですごし、巨匠たちの作品をつぎつぎと見ながら、じつに豊かな才能と個性を感じていました。また、これらの不滅の作品を描きだした人物は、自分自身（と個性）をも大きく育てていたことも知りました。それは私に強烈な印象をあたえ、ひるがえって、いまの私は、ノルウェーでヤシノキを育てようとしているよう

なものでした。あわれな私のヤシは霜^{しも}のたびにしおれ、芽をのばしては枯^かれてしまいました。私は自分がなれないものになろうとしてきた、とようやく気づきました。私は私で、気を楽にして、^②アメリカのマツを大きくすればいいのです。

(今泉吉晴『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』)

(注) ウルフ……ロンドンで知り合った動物画家。

問一 —— 線部① 「自信作『オオカミの勝利』は、金メダルどころか入選さえしませんでした」とありますが、その理由を、シートンがこの絵にこめた思いもふくめて説明しなさい。

問二 —— 線部② 「アメリカのマツを大きくすればいいのです」とはどのようなことですか、説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) タンジョウ日を祝う。
- (2) 想像力にトんだ人。
- (3) テツボウの練習をする。
- (4) パソコンで本の在庫をシヨウカイする。
- (5) ニソクサンモンでゆずり受ける。

受験番号

--

氏名

--

得点

--

このらんには何も書かないこと

	問二	問一	問四	問三	問二	問一
(1)						
(2)						
(3)						
(4)						
(5)						
⑦	⑥	⑤	④	③	②	①